



東京
大学

環境三四郎

学習と行動、批判ではなく提案、交流そして成長

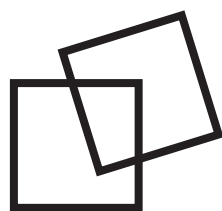
ベトナム・スタディツアー 報告書

2009.2.19～3.2



VIETNAM

ベトナムスタディツアー 報告書



C O N T E N T S

- 1 企画概要
- 3 出発までの道のり
- 4 現地活動報告
- 17 参加者の感想
- 36 結びに

企画概要

はじめに

本スタディツアーは、国際協力機構(JICA)がベトナムにて実施する技術協力プロジェクトおよび青年海外協力隊の方々の活動現場を訪問したものです。東京大学環境サークル「環境三四郎」のメンバーが中心となって独自に企画したものであり、大学1年生から、社会人まで10名が参加しました。

本報告書は、ツアー関係者の方々に、活動内容ならびに参加者の感想をご報告するものであると同時に、今後のスタディツアー企画を望む後輩達への参考として作成したものです。現地滞在時の印象を大切にしたいため、十分に推敲されていない文書も掲載されておりますが、寛容な気持ちでお読み頂いた上で、どうか忌憚の無いご意見を頂ければ幸いです。

なお、本企画の実施に当たっては、JICA、(社)青年海外協力協会(JOCA)の皆様をはじめ、多くの方々にお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

実施期間

・2009年2月19日(木)～2008年3月3日(火) 12泊13日

参加者

・雨宮新	(あめみや あらた)	東京大学教養学部 2年
・安藤達也	(あんどう たつや)	同 工学部 4年
・内島健太	(うちじま けんた)	同 教養学部 1年
・河村直哉	(かわむら なおや)	同 教養学部 2年
・桐生朋文	(きりゅう ともふみ)	同 農学部 卒業：企画代表
・小松才恵子	(こまつ さえこ)	同 文学部 4年
・高田綾子	(たかだ あやこ)	同 教養学部 2年
・丹羽桃子	(にわ ももこ)	同 文学部 4年
・三上貴司	(みかみ たかし)	同 教養学部 2年
・山崎潤一	(やまさき じゅんいち)	同 経済学部 4年

訪問先

- ・JICA技術協力プロジェクト
プロジェクト名：循環型社会の形成に向けてのハノイ市3Rイニシアティブ活性化支援プロジェクト
プロジェクトサイト：ハノイ市
- ・青年海外協力隊の皆様（職種 / 任地）
 - ・小学校教諭 / バクザン省
 - ・小学校教諭 / バクザン省
 - ・小学校教諭 / バクザン省
 - ・理学療法士 / バクザン省
 - ・幼児教育 / ダナン市
 - ・幼児教育 / ダナン市

ツアー日程

日付	摘要	場所
2月19日(木)	11:00 成田空港発 15:10 ハノイ着	ハノイ市
2月20日(金)	AM：JICAベトナム・ハノイ事務所訪問 PM：技術協力プロジェクト見学	ハノイ市
2月21日(土)	終日：サパ山岳少数民族村訪問	サパ
2月22日(日)	終日：サパ山岳少数民族村訪問	サパ
2月23日(月)	昼：農業農村開発省専門家との懇親会 午後：移動	ハノイ市
2月24日(火)	AM：青年海外協力隊（小学校教諭）訪問 PM：青年海外協力隊（小学校教諭）訪問	バクザン省
2月25日(水)	AM：青年海外協力隊（小学校教諭）訪問 PM：青年海外協力隊（理学療法士）訪問	バクザン省
2月26日(木)	AM：移動 PM：青年海外協力隊（幼児教育）訪問	ダナン市
2月27日(金)	AM：青年海外協力隊（幼児教育）訪問 PM：自由行動	ダナン市
2月28日(土)	AM：ハイバン峠見学 PM：自由行動	フエ
3月1日(日)	AM：自由行動 PM：寝台列車にてハノイ市へ	フエ
3月2日(月)	終日：自由行動	ハノイ市
3月3日(火)	6:40 成田着	

出発までの道のり

現地下見

日程：2008年12月6日(土)～9日(火)3泊4日

内容：JICA ハノイ事務所での打ち合わせ，青年海外協力隊の方々との打ち合わせ，
現地交通機関，宿泊施設選定等。

事前勉強会

第1回 日 時：2009年1月10日（土）

テーマ：Challenge and prospect of the city Hanoi — According to The
Comprehensive Urban Development Program in Hanoi Capital City
of the Socialist Republic of Vietnam (HAIDEP)（発表者：安藤達也）

テーマ：Overview of Vietnam（発表者：桐生朋文）

第2回 日 時：2009年1月18日（日）

テーマ：Rehabilitation of Natural Forest in Degraded Watershed Area in the
North of Vietnam（発表者：高田綾子）

第3回 日 時：2009年1月24日（土）

テーマ：The inflation in Vietnam（発表者：山崎潤一）

テーマ：The Vietnamese value system（発表者：丹羽桃子）

第4回 日 時：2009年1月31日（土）

テーマ：Implementation support for 3R INITIATIVE of Hanoi City for Cyclical
Society（発表者：内島健太）

第5回 日 時：2009年2月8日（日）

テーマ：History of Vietnam（発表者：三上貴司）

テーマ：Minority groups in Vietnam（発表者：雨宮新）

行動記録

11:00 成田空港出	17:30 ミーティング 1
15:00 ハノイ到着	18:30 夕食
16:30 先発隊と合流	20:00 ミーティング 2
17:00 宿泊地到着	25:00 就寝

活動報告

旅に出る時は、いつも直前準備。例によって今回も、殆ど徹夜でパッキングをして、慌ただしく自宅を後にした。大きなバックパックを背中に、体の前にはデイバッグ。使い古したマラソンシューズを両足に、両腕には段ボール箱。こんな恰好で旅行に出かけるのは、実に二年ぶり。社会人になってからの 2 年間は、当然のことながら 1 カ月なんていう単位で旅に出る事は出来ず、あれほど親しみを覚えていたアジアの暑く湿った風も、いつしか思い出の中に沈んでいた。

次にこの家に帰ってくるのは、一ヶ月後。日本では桜の咲く時期だろうか。暑い東南アジアから帰ってきて、「日本は寒いね」なんて言いながら思い出話をするのを楽しみに、成田空港へと向かった。海外に渡航する時の、出発前のこの高揚感がたまらない。

成田空港に到着したのは、飛行機の出発する 2 時間半前。遅刻者が出るどころか、全員が集合時間よりも遥かに早く到着。今回は初海外、初途上国のメンバーもあり、どこことなく緊張して身構えた空気が漂っている。彼らの表情が、これからの 2 週間でどう変わっていくのだろう。どんなことを語り合うのだろう。再び成田空港に戻ってくる日の事を想像しながら、まだ寒さ厳しい日本にしばしの別れを告げた。

現地時間 15 時にはハノイのノイバイ国際空港に到着。先に出発していたメンバー 5 人とも無事に合流し、今回スタッフ参加者の 10 人全員がベトナムにて初めて揃った。一先ず心配していた最初の関門はクリア。そこから約 20 分間の道のりを歩いて、今回ハノイ滞在中に宿泊させて頂く友人宅へ。大学時代の同窓にあたる友人なのだが、こうして卒業後も一緒に活動できる友人を持てた事は、この上ない誇りである。

夕食にはまだ少し早い時間だったので、初のミーティングを開催。これから毎日行うミーティングの担当者や、見学先毎の報告書の作成者、学校で授業を行う際のク

ラス分け、などを話し合った。こうして、これから起こる具体的な事柄について打ち合わせをしていくと、スタッフが始まったのだという実感が沸いてくる。

その後、友人も帰宅したため、全員で近くの食堂で夕食。ベトナムでの最初の食事なので、きれいなレストランにすることも考えたのだが、肩慣らしの意味も込めて、あえてローカルな食堂で夕食とした。初海外の参加者も含めて、殆どブローラーのままのような状態で出てきた鳥鍋を、みんなが抵抗無さそうに食べていたのには一安心。嬉しい。

街灯の無い、暗く湿った道。溢れかえるベトナム語に、凄まじいクラクションの音。鼻をつく生ごみと香辛料の混じった臭い。世界がまだ「不慣れなもの」で溢れかえっていると、自然と恐怖心が沸いてくる。それだけに周囲に対する感覚が鋭くなる。こんな感覚も、とんと忘れていた。時間が経ち、後日再びハノイへ戻ってきた日には、これらの景色が自分の目にはどう映るのだろう。

夕食後、今回 2 回目のミーティング。こちらが本番。事務的な事は既に到着直後のミーティングで話し終えていたので、今回スタッフに参加しようと思った動機、これからの 2 週間に自分が望むこと、等を全員に話してもらった。

体裁を整えるでもなく、どう話したらいいかを考えるでもなく、ただ、自分の心に正直に、心の奥底で感じていることを絞り出すように言語化する過程。そして、それに聞き手が確かに共感してくれる実感。その相互作用に対して沸きあがってくる生々しい喜び。こういう感覚も、日本にいと忘れがちだ。心底正直に話していいコトバは、発するのが気持ちいいのだ。忘れたくない。

他者と本気でぶつかり合う時間を、「非日常」の力を借りて容易に作り出せるのが、海外でのスタディツアーの醍醐味だと思う。異国の地で、年齢も異なる多くの人間と、生活を共にし、体験を共にし、感情を共にするからこそ出来ることだ。この感覚を多くの若者に知ってもらいたいから、僕はこの企画を思い立ったのだった。自らの動機を再確認した夜でもあった。この日は初日だということに、いや初日だからこそか、結局 25 時頃まで話し込んでしまっていた。先は長い。明日からのみんなの体調が、少々心配である。

(文責: 桐生朋文)

行動記録

- 7:30 近所の屋台にて朝食
- 9:00 JICA のオフィスへ
- 10:30 カフェで昼食
ハノイ駅にいたところで、突然の雨
- 13:50 3R プロジェクトオフィスへ
プロジェクトの説明
学生ボランティアとの交流
- 18:00 堆肥工場の見学
- 20:40 サパ行きの寝台列車

活動報告

今日からスタツア本番。昨日ハノイに到着して興奮冷めやらぬメンバーたちは、夜更かしで寝不足気味ですが、とっても元気です。朝は近所の屋台でローカルな朝食をいただきました。どうやらベトナムの方は屋台でいわゆる「モーニング」を食べる方が多いようです。また、ベトナムの方は朝が早いのにびっくり。出勤時間も日本より大分早い様子。

朝食後は、今回お世話になる JICA のオフィスにまずは伺いました。オフィスは高層ビルの一隅で、大変綺麗です。こういう場所でベトナムのために働いておられる日本人の方がいることを普段日本にいては感じられないので、職員の方のお話を大変興味深く聞かせていただきました。

市内のカフェで昼食。その後少し自由時間があつたのですが、ハノイ駅をぶらぶらしているところで突然の雨！タクシーで 3R プロジェクトのオフィスへ向かいます。オフィスではプロジェクトの概要を説明していただいたあと、学生ボランティアの方々と交流する時間がありました。学生さんは一人を除いてみんな女性！まるで女子高のような雰囲気に圧倒されながらも、気さくに英語で話しかけてくれて、一生懸命活動を教えてくれる彼女たちにたくましさを感じました。こういうボランティアに参加している学生さんたちは、かなり裕福で英才教育を受けているのだらうという声もメンバーからちらほら聞かれ、ベトナムにおける格差というものも少々感じさせられました。

その後は堆肥工場の見学へ。キャンパス内で行っている小規模な堆肥しか見たことがなかったので、堆肥を行うた

めの機械・設備を見学できて勉強になりました。説明をしてくださった若い職員の方が、ご自分のお仕事に誇りをもっていらっしゃるのが伝わってきて、とても素敵でした。スタツアメンバーたちは英語での質問に大分慣れてきたようです。事前学習において英語のトークをしてきた成果でしょうか？

移動する際に気になるのは、なんといってもハノイ市内の交通混雑です。バイクと自転車が大多数、2 人乗り 3 人乗りは当たり前。けたたましく鳴り響くクラクションにはなかなか慣れることができません。私自身、以前交通問題を大学のゼミで研究していたこともあり、ベトナムの交通事情が大変気になりました。JICA の職員の方がベトナムというのは現在のタイの 20 年～30 年前の状態にあるということを言っておられました。刻々と変化しているベトナム社会において、変化の一つとして出てきたのが今の交通混雑状態だと思うのですが、それが今後どのように変化していくのかということに今後も注目していきたいと思います。

夜は明日からのサパ訪問のため、サパ行きの寝台列車に乗りました。夕食はハノイ駅のロッテリアで購入。また駅に来る途中において屋台で買った魚やとうもろこしもありました。私は寝台列車の雰囲気大好きなのですが、今回の寝台は非常に綺麗で快適です。今日のミーティングは寝台に揺られながら、個室のうちの一つにみんなで集まり行いました。少し疲れが出始めたメンバーもいたようですが、みんなまだまだ体調は大丈夫なようです。明日は朝早いので、みんな早めに眠りにつきました。

(文責:丹羽桃子)



行動記録

- 6:00 ラオカイ駅到着
バスにてサパへ移動
- 7:00 サパ到着、各自シャワーを浴び朝食
トレッキング開始
- 19:00 宿泊先へ到着、夕食

活動報告

早朝。車窓が入り口の扉をたたく音で目が覚めた。外はもうラオカイだ。まだ外は暗い。普段、寝台列車は苦痛ではないのだが、初めての海外旅行ということもあり、体が重かった。みんなはまだベトナムに来て日も浅いこともありとても元気だ。

薄暗い駅のホームから駅を抜けると、たくさんのドライバーがネームプレートを持って待ち構えていた。すごい人ごみだ。まだ朝早いというのに、ベトナム人の朝は早い。

人ごみの中からガイドさんを探し出す。中には客引きとして声をかける輩もいるので注意が必要だ。何とかガイドさんと合流し、大きなバンに乗って僕らはサパへと向かった。例によってガイドさんはテンションが高い。バンは舗装されてない道路のせいで上下に激しく揺れ、僕らの体力を奪った。まだ朝だというのに、これから大丈夫だろうか。

サパへついた。やっとシャワーを浴びることが出来る。しばしの休息だ。シャワーの後、時間があつたので少しサパの町を散歩してみた。すごく小さな町だ。どこへ行くのか、ちらほらとベトナム人の姿が見える。教会まで歩くと近くにバザールがあつた。たくさんのみやげ物が売つてある。歩いていると物売りの少女に会つた。決してきれいとはいえない格好で、僕らに近づいて、買ってくださいと懇願する。果たして本当に買っていいものか。日本では決して体験できない状況に、少し困惑した。

そうこうしているうちに、いよいよトレッキングがスタートした。ベトナムでも有名なツアーらしく、他のガイドさんに連れられている外国人も大勢いた。そして外国人の周りには、ベトナムの少数民族の女の人と一緒に歩いてきた。英語もそこそこ話せ、会話もちゃんと成り立つ。

しかし、会話を進めているうちに、彼女らの商品を買うようにと迫られてしまった。どうやら僕らのような外国人の観光客を相手に、商売をしているらしい。仲良くなって商品を売りつける。なかなか賢い作戦だ。

しかし昼食のとき、ガイドさんいわく、このような観光客相手の楽な商売に傾倒してしまうことにより、みなが農業を辞めてしまい、本来学校に行くはずの少女も、有効な働き手として借り出されてしまう。彼女らから商品を買うべきではない、と力説されてしまった。会話の内容を聞いていたのか、外にいた彼女らは、次第に僕らから離れていった。難しい問題を目の当たりにしてしまった。次に彼女らにあつたときに、どう接すればいいのだろうか。

宿に着いた。ホスト役の家族が温かく迎えてくれる。そして、あたりは次第に暗くなっていく。ネオンや街灯はない。

ベトナム料理を振舞ってもらつた。食事のお供はハッピーウォーターだ。未成年の僕はもちろん飲めない。日本酒のようなものだった(らしい)。今日あつたこと、考えたこと、みんなで語り合つた。

そして食事も終わり、ミーティングも終わり。疲れた体でベッドに滑り込む。しかし、僕らには起きておかなければいけない理由があつた。眠いなか必死で日が変わるのを待つ。

そう、22日は僕の 20 歳の誕生日だ。ハッピーウォーターが待っていた。

(文責:河村直哉)



行動記録

- 6:00 起床
 バクハーに移動後、食事
 食事後、バクハーにてマーケット見学
 トレッキング、川下り
 夕方 ラオカイに戻り、国境見学
 20:00 夕食後、ラオカイ駅から寝台列車でハノイに
 車内にてミーティング

活動報告

お世話になった民家の二階で目を覚ました後、さっそくバスにてバクハーに移動した。昨日一日中トレッキングした疲れが残っているのが皆の表情から見て取れる。

食事後、バクハーのマーケットをガイドさんが案内してくれることとなった。一介の観光客からすると、町の雰囲気はサパとあまり変わらないように思えるが、サパと違い霧が出ていなかったせいか少々活気に勝るような気がした。

マーケット自体は観光客向けのお店もあったのだが、奥の方には現地の人向けと思われる食材を売っている店や、家畜の売買をしている広場もあった。僕はマーケットを巡るのは好きで旅をすれば必ずマーケットに寄ることになっているのだが、実際に家畜を売買している現場を見るのは初めてだったので、少々新鮮な気持ちでマーケットを練り歩いた。家畜の売買ははっきり競りで行われていると思っていたが、相対交渉で行われているようで、広場のあちらこちらに豚や水牛を綱で携えた売人が腰をおろしていたりした。おそらくマーケットのサイズがそれほど大きくないため、中央集権的な市場を整備するインセンティブがないのだろう。

街を見終えると、ガイドさんは軽いトレッキングへと僕らを連れて行った。途中一軒の民家にお邪魔したのだが、そこにはテレビなどの電化製品が多少あり、後で聞いた話だとその事に驚いたメンバーがいたようだ。普通の日本に暮らしていると、途上国の生活というものに過度の幻想（電気や水道がない、etc）を抱くことがままあるが、途上国と言っても千差万別、電気が通りテレビやラジオの一台くらいあっても全く不思議ではないのだ。

一行は川下りをして涼しい風に当たった後（あの日は本当に暑かった）、バスにてラオカイに戻って中国との国

境に向かった。日本人にしてみれば、川で隔てられた陸続きの国境は慣れないものだが、むしろ一般的にはこういった国境の方が一般的には多いはずだ。川の兩岸には入国管理局の建物があるのだが、川にかかっている橋をトラックや荷車がひっきりなしに往来している様を見ると、国境の硬さと柔らかさを同時に見たような気がした。

食事をした後、ラオカイの駅から寝台列車に乗り込んだ。寝てしまえば、朝にはハノイに着く。まるまる二日間の滞在といった短いサパ滞在だったが、めいめい色々感じるころはあったようで、ミーティングや道中色々話を聞かせてもらった。

ラオカイを出た列車は単調なリズムを刻みつつハノイへ向かう。僕自身は駅に着いたら一足先に旅から離脱してしまうが、皆の旅はむしろこれからが本番だ。明日の別れと皆の旅の無事を思いつつ、体を床に伏せることにした。深夜一時過ぎの事だった。

(文責:山崎潤一)



行動記録

4:45 夜行列車でハノイ駅着
5:00-5:30 Meeting
7:00 ハノイ到着
11:30-13:30 農業農村振興省専門家との懇親会
15:00 ハノイ出発
16:20 バクザンホテル到着
16:30~ Meeting
18:40~ 夕食・鍋@バクザン市内 w/ JOCV
21:15~ 踊りの練習@バクザンホテル
22:00 JOCV の方々も交えて全体ミーティング

活動報告

車掌に乱暴にドアをノックされる。明け方、というよりまだまっ暗なのだが、もうハノイ駅についてしまったようだ。駅の待合室のベンチで昨日列車内では行わなかったミーティングをする。みんなまだまだ眠そうだ。

そのあと 1 時間くらい駅の待合室でのんびりしたあと、タクシーで宿泊場所に帰る。部屋に着くと、我が家に帰ってきたように落ち着くのであった。

休みのはずの土日は「アクティブレスト」。みんな疲れの色は隠せなかった。希望者だけで近くのフォー屋へ食べに行き、朝食をとった。他の人たちは宿泊地でのんびり過ごしていた。

その後 11:30 までフリーとなり、桐生さんと僕と、みかみんでタクシーに乗り市街へ繰り出した。桐生さんはツアー関連の雑務をこなし、僕は駅で鉄道のチケットを買に行き、みかみんはハノイ市街を観光していたようである。

お昼。みんなそろって、再びタクシーで待ち合わせのベトナム農業農村振興省へ。日本から派遣されている専門家の方々と、農業省からほど近いレストランでランチミーティングをした。

まず簡単に専門家の方々から、ベトナムにおける農業政策の現状についてお話をいただいた。ベトナムでの農業の一番の問題は農業の集団化ができていないこと。だから今は主に、協同組合を作ること促すプロジェクトを各地で行っているのだそう。他にもベトナムの農村開発など農業に関わるいろいろなお話を伺うことがで

きた。

他にも、ベトナムの観光の話等を伺った。ホイアンという世界遺産の町に行った方がいいとか、ベトナムのオスメの料理はこれだとか。本当に気さくで優しい方々だった。

お昼を食べ終わったあと、再び宿泊地に戻り、チャーターしたバスでバクザン省に向かった。ここで青年海外協力隊の方と合流し、一足先に帰る予定の山崎、丹羽、河村と別れた。

1 時間半ほど走り、バクザン省へ着く。ハノイ北部の小さな田舎町なのかと思っていたが、市街地も広く、建物も多く、それでいてハノイよりは交通量が少なく、静かで落ち着いたいい町であった。観光だったら絶対来ることはないだろうが、縁があってこういう風な静かなところに来られるのはとてもいいことである。

さて、着いたら早速集まってミーティングを行った。まだ十分に議論できていなかった、授業でどのような内容の出し物をするのかについて最後の話し合いをした。

ミーティング中に、バクザン省で活動されている他の協力隊員の方々とも合流する。まずは顔合わせということで、ホテルからすぐの鍋料理屋に夕食を食べに行ってきた。

帰ってきてから、僕は翌日の授業に向けて踊りの練習。当初は『涙そうそう』などを考えていたが、ベトナムではさほど有名ではないらしいので、急遽桐生さんとコマが以前やったことのある『世界で一つだけの花』を踊ることにした。桐生さんのパソコンで曲の動画を見て、それを元に踊る。

その曲だが、最後の部分しか振り付けがなく、間を持たせるためになにか踊りを考えなくてはならないのであった。結局なぜか EXILE の芋虫みたいな踊りで乗り切ることとなった。明日はどうなることやら。

その後全体ミーティング、みんなの自己紹介。JOCV の皆さんも交えて楽しいひとときだった。みんなの熱い思いや、隊員の方々がどういう志で海外で働いているのか、などとても興味深い話もしていた。その後は明日に備えて折り紙の見本を折ることしばし。就寝。明日が楽しみですね。

(文責: 安藤達也)

行動記録

- 7:05 ホテルで朝食 (バインミー)
- 8:10 タンミー小学校到着、小学生と交流
- 11:10 小学校出発
- 11:40 定食屋で昼食
- 12:20 バクザンホテルへ
- 14:00 ドインゴー小学校到着、小学生と交流
- 16:45 小学校出発、チェー屋でおやつを食べる
- 17:45 バクザンホテル着、希望者のみ市場へ
- 19:30 夕食に山羊鍋を食べる
- 22:30 部屋でミーティング、
翌日の障害児村訪問に備え手話を練習

活動報告

今日も朝が早い。寝ぼけまなこをこすりながら朝食を食べ、折り紙や筆記用具を持ってバスに乗り込む。協力隊の方々とも昨日合流することができ、6日目にしてようやくスタツアのメインプログラムが始まったという感じ。わくわくする。

10分ほどバスに乗って、隊員 N さんの任地であるタンミー小学校に到着。校長先生に挨拶したあと7人のメンバーが二つに分かれて教室に入る。前に並んで子供たちと対面。緊張。でも、子供たちも緊張しているみたい。全員じっと私たちのことを見ている。覚えてたのつたないベトナム語で順番に名前と年齢を自己紹介。あっという間に緊張が解けた。「アーヤーコ」とゆっくり言うと子供たちもにこにこしながら「アーヤーコ」と復唱してくれる。さあ、授業開始！

子供を4つのグループに分けて折り紙を教える。好きな色の紙を一枚だけ取ってもらい紙風船を作ることに。みんな、興味津津だ。ゆっくりゆっくり折り進める。器用な子も不器用な子もいたけど、無事、全員完成。出来上がった紙風船を膨らませて遊んでみよう。「イエーイ！」と言って笑顔向けると、「イエーイ!!」と歓声をあげてはしゃぐ。まったく元気だ。ほかの3つのグループも折り終えたようだし、机を元通りに並べなおし、「世界に一つだけの花」を歌って踊る。声もそろっていなし、振り付けも即興だし、恥ずかしい気持ちもある。それでも拍手をもらい授業を終える。

同様にあと2クラスでも授業。間にはさんだ休み時間では子供たちのサイン攻めにあう。ペンとノートを持って私たちの周りに群がってくる。ローマ字で AYAKO、漢字で綾子

と書いてやると嬉しそうに別のメンバーのところへ行くのだ。とにかくたくさん日本人のサインが欲しいらしい。自分にもそんな時期があったな。小学生のとき、ALT の先生に友だちとサインをもらいに行き、筆記体の英語で名前の書かれた紙を大事に筆箱の中に入れていた。

最後は校庭に集合した全校生徒の前で歌を披露。用意していた「世界に〜」だけでは間が持たず、アドリブで「幸せなら手を叩こう」を披露し学校を去る。

お昼を食べ、ほんの少しホテルで休憩したあと隊員 Y さんの赴任地ドインゴー小学校へ。ここでも校長先生方に挨拶をしてから教室へ。今度は7人一緒に授業。午前より自己紹介も折り紙を教えるのも慣れ、余裕がある。楽しみながらできるし、他のメンバーの様子も見ながら進められる。気づいたのは、メンバーの表情。子供たちの笑顔が素敵なのは言うまでもないが、メンバーひとりひとりの笑顔がどこかいつもと違う。素直というか、穏やかというか…きれい。見ていてとても気持ち良くなるような表情だ。思わず、盗撮。

休み時間には校庭に出て指差し会話帳で子供たちと交流。あっという間に時間が過ぎバスに乗る。ホテルには直帰せずチェー屋さんに寄り、生まれて初めてのチェーを食べる。チェーとはベトナムの冷たいあんみつ。この初夏のような天気授業を6回分、何百人という子どもと接した疲れと充足感の中食べるチェーは、最高においしい！これは、もう、大好物。

ホテルに戻り、希望者で町の市場をひとめぐり。米屋・服屋・果物屋・雑貨屋・花屋…。まだまだ、ベトナムのいろんな物が新鮮。

ミーティングで感想を聞くと、やはりみんな相当楽しかったみたい。心配していた歌と踊りもノリでどうかなるとわかったし隊員の方にも授業がどんどん良くなっていったとほめられた。明日の障害児村訪問に備えて隊員 A さんに手話を教わり、気づけば12時をまわっている。明日もハードスケジュール。そろそろ寝なくては。

(文責：高田綾子)

行動記録

- 6:50 朝ごはん買出し
- 7:50 バクザンホテル出発
- 8:10 Handicapped Children Village
- 11:00 バクザンホテルに戻る
- 12:00 ホテルをチェックアウト, 昼食
- 14:00 ニンソン小学校
- 16:30 小学校出発
- 17:00 バクザン市内のカフェにて休憩
- 18:00 バクザン省出発
- 20:00 ハノイ到着, 夕食
- 22:00 ミーティング

活動報告

バクザンで過ごす3日目。朝早く起きて買出しに行った人もいたが僕は昨日の疲れであまり眠れず、買ってきたもらったバインミーを移動の車内で食べた。今日もJOCVの方の教育施設を訪問する日だ。最初は障害児村。思ったより小さくこじんまりとしたところだった。

聴覚障害の子たちのために、前日に協力隊員の方々に教えて頂いて練習したベトナム語の手話で自己紹介を試みる。そのあと何人かのグループに一人ずつついて一緒に折り紙を折った。もともと僕らがベトナム語を話せないために言葉が通じないので、あまり障害を持った子ということを特に意識することがなかった。どう伝えればいいのか。言葉が頼りにならない分、身振りとか目線や表情で思ったことを伝えるべく、普段よりずっと気を使って振舞ってみた。

昼はバクザン市内に戻り、水上レストランで昼食にした。川魚を丸ごと煮た迫力のある料理が出された。非常においしかった。

ボーイさんが注文をとり間違えてしまったらしく、少しトラブルになった。気弱そうな、はにかんだ表情が素敵な少年だったのだが、明らかに落ち込んでふてくされていたのが、手をつけられずに置かれたままの魚料理と共に、ちょっとかわいそうだったなと印象に残っている。

午後は郊外のニンソン小学校を訪問した。

ここでも子供たちは非常に元気だったのだが、目に留まったのは子供たちの体の小ささだった。まわりつく彼

らを持ち上げて振り回していたりするとよく分かったのだが、昨日訪問した街の小学校の子供たちに比べて明らかに小さくて軽い。食べているものが違うところも違うものなのか。都市と田舎との格差がこうやって現れるものなのか。

いつもどおり自己紹介して、折り紙を教える。もう4回目ともなると慣れてきて、何か違うことがやりたくなってくる。「きれい!」とか「うまい!」とか簡単なベトナム語を覚えてしゃべってみる。発音がだめなのかあまり通じなくてへこんだけど。

ドッジボールをやるといって、皆我先に教室からグラウンドに飛び出していった。僕らも加わって一緒に遊んだ。ドッジボールなんて何年ぶりだろう。楽しかったが、小さな子相手ということで自分らはつい手加減してしまっただろう。年と体格に物を言わせて本気で圧倒して、子供たちにとって「あいつを皆でやっつけろ」みたいな存在になった方が面白かったのかもしれない。

ニンソン小学校をあとにして、JOCVの4人の先生とお別れした。4人はバクザンにいた3日間の間ずっと一緒にいてくれて、大変にお世話になった。みなそれぞれの志を持った熱い人で、それでいて温かい人だった。彼らの手厚い協力があってこそこれだけの体験ができた。感謝。夜の道を車でハノイに戻る。皆疲れたのか口数も少なく、眠そうだ。バクザンに来て、とても濃厚な3日間を過ごして、それぞれの中で何か変わったような気もする。ハノイの風景も、戻ったらここに来る前とは少し違って見えてきたりして。長いスタディツアーも半分を過ぎて、後半戦に突入した。(文責:雨宮新)



行動記録

- 8:40 ノイバイ空港到着
- 10:20 離陸
- 11:00 ダナン到着
- 12:30 隊員 O さん、隊員 K さんと合流
幼稚園訪問を前にミーティング
- 14:10 幼稚園へ出発
- 17:30 プログラムを終え、ホテルへ帰る
- 22:30 食事後、海岸で遊び終えてホテルへ戻る
- 23:00 ミーティング

活動報告

早朝に起床し、飛行機でダナンへ行く。ホテルのロビーで、青年海外協力隊員の O さん、K さんと合流した。昼食を簡単にすませ、ミーティングを開く。どうも、当初の予定とは大きく変わったらしい。こちらが踊りの披露等をするだけでなく、幼稚園側でいろいろなおもてなしをしてくれるという。今まで行った小学校とは違う形になるようだ。少し、不安になったが、やるしかない。

幼稚園に着くと、まずは園長先生の待つ部屋へと案内された。そこでは、幼稚園の紹介の後、オフィシャルな感じで質疑応答の時間が取られた。主に、国から援助を受け、先進的な取り組みをしている幼稚園であることに関する質問がなされた。

そして、その後は、さっそく年長組の体育の授業に参加する。そこでは、フラフープを使った運動や、「幸せなら手を叩こう」と同じリズムで行われる、絵と同じポーズ・動きをするということなどを行った。少し恥ずかしいかも？ でも、なんだかんだ楽しんでいるぼくら。最後に、子供達から写真と絵をもらった。今日に向けて、書いてくれた絵たち。ありがとう。

そして、次の会場である体育館へと移動。入ってみると、まるでコンサートが始まるかのような驚くべき歓待。もったいないなんて言うてはいられない。応えなければ！

まずは、園児の踊りが披露される。クオリティの高さに本気で焦った。この次に、言葉は悪いが、正直「一朝一夕」で間に合わせた歌と踊りを披露しなければならぬとは！

挨拶は、けっこうウケた。特に、桐生さんの冗談は。

しかし、案の定、その後のぼくらの踊りは盛大にすべったのだった。子供達はぼかーんとしていた。ううっ……。その後は、各クラスによる歌や踊りの披露が続いた。途中、桐生さんとぼくは、二人でその踊りに乱入した！後日談だが、他のメンバー曰く、怖い顔して見ていた人もいたらしいが、隊員の方によれば、全然問題ないよ、とのこと。その後、今度はメンバーみんなで参加した。子供たちも参加してくれたおかげで、盛り上がったな、と思う。全ての組の催しが終わり、最後には、子供も先生も僕たちも、もうみんなで踊った。ここでも、小学校と同様、ハイタッチは健在だった。

すっごく楽しかった。すっごく疲れた。

そうして一度おしまいとなった。一人の先生が私のクラスでもう少し遊んでほしいということで、今度は 20 人くらいかな、少人数で遊ぶこととなった。授業の雰囲気も少し感じられた、かな。動物のものまねしたり、歌ったり。迎えにきた親たちが最初は怪訝な目で見えていたけれど、最後のほう穏やかに見ていてくれていた気がする。

そうして、一日が過ぎていった。

夜は、海辺のレストランで食事をし、夜の浜辺で遊んだ。運転手さんを待たせて、怒らせてしまった。ごめんなさい。

隊員の方とたくさん話した。彼らの思いを、聞かせてくれた。

子供たちと踊ったあの一瞬、きっといつまでも忘れない。幼稚園の子達は、大きくなるにつれ、この記憶も薄れていくのだろうか。でも、何かを残せたのか、そんな贅沢な悩みは措く。子供達にとっても楽しい一時となってくれたなら、そしてぼくたちが何か感じられたのなら、それだけで価値はあったのだと思う。

(文責：三上貴司)

行動記録

- 8:00 起床
- 9:00 ホテルにて朝食
- 10:00 2グループに分かれて、
 - ・青年海外協力隊(幼児教育)訪問
 - ・世界遺産ホイアン散策
- 18:00 夕食、ミーティング

活動報告

分刻みの強行スケジュールとなった青年海外協力隊訪問も昨日で無事に終了し、今日は終日フリータイム。丸々一日のフリータイムを取ったのは、スタツア始まって9日目の今日が初めてだった。こうして各自自由に使える時間を確保することで、心身ともに調子を整える事も出来るし、それまでのプログラムで感じたことを反芻する時間も取れる。貴重な一日であった。

この日は、ダナン市に残るグループと、世界遺産に指定されているホイアンの街へ観光に行くグループとに分かれて行動した。

世界遺産、ホイアン。その美しい町並みは見るものを魅了してやまない。そう聞いた僕は、この日、バスに乗ってホイアンに行くことを決意した。ベトナム料理が好きになった一日だった。

最初からホイアンを目指したのは安藤さん、高田さん、僕の三人である。他のメンバーは、昨日訪問した幼稚園を再度訪問しに行った。探し当てたバス停らしきものにとどまっていると、道の向こうからバスっぽい乗り物がやってきた。乗り込んで最後列の席に座る。

そんな僕たちのゆく手を阻むかのように、ボッタクリの精神に富んでいたバスの車掌さんは、日本人とはお金を出すべき人間たちのことである、と言わんばかりの顔で僕らを出迎えた。ええい、今思い出しても腹が立つ。

なんとか無事に到着し、しばらくホイアンの街を歩いて進む。途中、小さなお店でちまきっぽいものを食べた。これはおいしい。日本の雑誌で紹介された経験があるのがこの店の誇りのようだ。

午後に入るかどうかの時間帯に雨宮さん、三上さんと合流し、五人で一緒に昼食をとった。ホワイトローズとよ

ばれる蒸し餃子や、ホイアン風うどんカオラウ、揚げワントンなど、どれも素晴らしくおいしいものばかりだった。ベトナムに来てからというもの、ほっぺたが落ちまくりである。一気に幸せ気分を味わうこととなった。

また、このとき、店の中にずかずか入ってきて、僕らにハンモックを売りつけたハンモックおじさんのことは、おそらくその場にいた全員の記憶に永遠にとどまることとなったであろう。

昼食後は各自散策を続ける。暑かったので、僕はケムと呼ばれるアイスクリームをカートで売っていたおじちゃんから買った。チョコレートソースやナッツがたっぷりかかって2000ドンはとても嬉しかった。

日本橋で集合し、途中チェーという、ぜんざいのお店に立ち寄ってから、バスでホイアンを後にした。とにかくこの日は暑かったので、キンキンに冷えたチェーは格別に美味であったように思われた。

しかし、やはり帰りのバスでも、車掌のお金せびりは止まらない。行きよりも高い金額を要求されたが、雨宮さんがとなりの席の人の助けを得つつ頑張り、僕が知らないうちに行きよりも安い値段を払えばいいようになっていた。

夕方にダナン市に無事にたどり着いた後、昨日お世話になった幼児教育隊員のお二人と再び合流。ダナンで一番美味しいとの食堂でバインセオ(ベトナム風お好み焼き)のディナーを紹介して頂いた。また、東南アジア各国で食されている、孵化しかけのアヒルの卵も初体験。本当に楽しい夜となった。

隊員の方々とともに話しかけたのだが、明日の朝にはもう別の地域へと行かなければならない。名残惜しさを残しつつ、ダナンでのプログラムも無事終了した。

(文責:内島健太)



行動記録

8:00 朝食
10:00 ホテル出発 ダナン～ハイバン峠～フエ
14:00 フエ到着 ホテルチェックイン
15:00 昼食
15:30 ビーチへ
19:30 夕食
20:00 散歩
22:00 ミーティング@ホテル
22:30 散歩 今井さんを囲む会

活動報告

朝、眼を覚ますとそこには今井さんの姿が。今日明日と同行してくださるそう。お忙しい中、早朝にハノイから飛んできてくださったとのこと。ありがとうございます！

協力隊のお二人オススメの「おこわ」を朝ごはんにしようと町に出る。しかし行けど探せど見つからず、ようやく店にたどり着いた時には「売り切れ」。しかたがないので近くの出店でフォーをいただいた。

今日で二日間滞在したダナンとはお別れ。チャーター車で北上の旅だ。ハイバン峠を経てフエへと向かう。

ハイバン峠はベトナムの中央に位置し、国土を南北に隔てている。この峠を境に人も気候も変わるという。かつて峠越えには自動車でも1時間以上を要し、地形がら事故も多かったらしい。しかし2004年にトンネルが開通してからは、10分とかからずに峠越えが可能となった。物流も飛躍的に効率化し、経済効果はかなり大きかったようだ。なお、トンネルの工費の7割は日本のODAによって賄われている。

トンネルの開通によって、峠越えがいかに楽になったかを体感しようという話になった。すなわち、トンネルを通ってからいったんダナン側に戻り、かつての峠越えルートも通ってみよう、と。しかし運転手が「それは寄り道になるからダメ」と言う。そんな話は聞いてない、と桐生さんと今井さんが窓口になって旅行会社と電話で交渉。どうやら運転手は、旅行会社が契約しているタクシー会社から派遣されているらしい。旅行会社としては「寄り道OK」だが、タクシー会社が「寄り道NG」と言っており、運転手はどうしたらいいかわからない状態のようだ。今井さんががんばってくださったが、交渉に時間をとられたため、峠越えルートはあきらめて直

接フエに向かうことに。交渉のあいだ、することがないので他のメンバーと近くの浜辺をぶらぶらしていた。トラブルは運が悪かったが、交渉にあたるかっこいい今井さんが見られたのと、この浜辺が実にきれいだったのは儲けものである。風景で感動したのは久しぶり。浜辺の砂を持って帰る人の気持ちがわかった。去り際に協力隊のお二人との偶然の再会もあった。

二時ごろフエに到着。ダナンに比べると日差しがやわらかだ。宿は日本人ご用達というかんじで、スタッフは日本語がうまく、ロビーには日本の漫画がずらりと並んでいた。

大衆食堂で昼食をとったあと、メンバー全員で近くの浜辺へ。ダナンより涼しく、曇っていたこともあり「海日和!」というかんじではなかったが、みな童心に帰ってはしゃいでいた。安藤と今井さんはわんぱくに戯れ、高田さんはカニを追いかけ、雨宮は地元の尼さんをナンパしていた。観光客より地元の人が多かったが、水着を着る文化はないようで、GパンにTシャツといった格好のまま海につっこんでいた。濡れてもバイクで町へ帰る間に乾くのかもしれない。

散々遊んでホテルに戻り、夕食をとり再び町へ出る。フエ名物の「しじみごはん」は日本人好みの味だった。そのまま夜の散歩に繰り出し、ライトアップされた橋と王宮をのんびり眺めた。王宮では地元の高校生がたむろしていた。「指差し会話帳」でコミュニケーションを試みたところ、あちらもノリがよく、キャッチボールをしたり年齢あてクイズをしたりした。「しじみごはん」では足りなかったメンバーがおいしい店はないかと聞くと、近くのレストランを紹介してくれると言う。しかし「すぐそこ」のはずが延々歩かされる。たかられるのではないかという不安や、疑いの目で見てしまう申し訳なさが交錯し、あまりいごちのよい時間ではなかった。たかられはしなかったが、色々を気をもんでみな疲れたようで、そのままタクシーでホテルに戻った。

ミーティング後、有志メンバーで今井さんを囲む会を開催。今日の今井さんは桐生さんを差し置いて、働く男のカッコよさを見せつけてくれました。拍手！

(文責:小松才恵子)

行動記録

- 7:00 起床
7:30 フェ・ビンジュオンホテルにて朝食
(終日フェ市内フリー)
8:30 安藤・雨宮・高田・三上の4人で昨日の尼さんの寺へ行く
尼さんたちと折り紙などして交流
12:00 寺にて昼食をいただく
13:00 頃 寺を出発
市内を散策
16:00 頃 王宮を見学
17:30 ホテル周辺で桐生さんと合流、屋台で夕食
18:00 ホテル集合、皆でチェックアウト
19:15 寝台列車にてフェ出発、ハノイへ
20:00 車内にてミーティング

活動報告

今日は終日フリータイム。僕らの予定は、昨日出来たばかりの友達に会いに行くことだった。

昨日海で話して知り合った坊主頭の子たちに、「明日遊びにきなよ」と言われて、彼らの住んでいる寺に行く約束をしていたのだ。住所を紙に書いてもらっていたので、ホテルから4人でタクシーに乗って、そのお寺へに向かった。

僕らが訪ねた場所はお寺であり寄宿舎のようなところでもあるようだった。昨日会った子達と、さらに何人もの尼さんが迎えてくれた。尼さん。そう。ここで初めて気づいたのだが、お坊さんではなくて彼女らはみんな尼さんだったのだ！

彼女らは突然訪れた僕らを本当に手厚くもてなしてくれた。案内もしてくれたうえ、なんとお昼までご馳走してくれた。肉を食べない信条らしく、いつも作っている米と野菜と豆腐のみの料理だが、どれもおいしく、そして品数も多く、豪華な食卓だった。

僕らがお昼をいただいている間、尼さんたちはお経の時間だそうで別の部屋に集って皆でお経を朗読していた。音程のしっかりした、よく通るきれいな声だった。

せっかくなので何か遊ぼうということで、持ってきた折り紙を使って一緒に鶴とか箱を作った。学校訪問も一通

り終わったのに、まさかここでまた折り紙が役に立つことになるとは思わなかった。

ずっといてもいいくらいの豊かな時間だったが、昼過ぎにそのお寺をおいとまして市内を歩き回ることにした。お寺の人たちは皆笑顔で見送ってくれて、連絡先もくれて、最後に門のところで集合写真も撮った。

さてお寺を出た後、川ぞいの市場を少し見て回り、川を渡るべくその辺の渡し船のおじさんと交渉して、お金を払って向こう岸まで載せてもらうことにした。おじさんの子供だろうか、小さな子供たちが一緒に乗っていた。かなりのいたずらっ子で、僕らの持っている果物をねだって食べたり、カメラで遊んだりする。

これがおじさんの仕事なのだろうか。子供たちは学校へ行かないのだろうか。お母さんはどこへ行っているのだろうか。いろいろ不思議なことはあった。そうしたことを聞いてみたくなるたびに、ベトナム語が話せたらなあと思うものだった。

暑い日だった。川べりの公園で少し昼寝して、本屋を見たりして、それから折角なので世界遺産の王宮に行った。現地の人が絶対払わないような外国人料金を払って入場する。王宮の印象は正直言って薄かった。それは、そこに住んでいたであろう由緒ある人に対する思い入れが別れないからだろうか、それともその世界遺産がそこらじゅう補修中だったり、銅像かと思ったら軽いプラスチック製だったりと色々残念だったからだろうか。

とにかく、僕らにとっては世界遺産より、ガイドブックなんかには載っていない、どこにでもありそうなお寺と、そこで出会って一緒に遊んだごくふつうの尼さんたちのほうがずっと強く印象に残って、一生ものの思い出になったのだ。

こうしてフェでの自由行動も終わり、皆で集合して、ハノイに戻る寝台列車に乗った。この日のミーティングは寝台列車の個室の中。終日自由行動だったので、各人の一日の行動記録やそこでの感想が話題の中心となった。長かったスタディツアーもいよいよあと一日を残すだけとなった。

(文責：雨宮新)

行動記録

9:30 ハノイ駅着、安藤さんは空港へ
 10:30 朝食（フォーガー）
 Free Time
 17:00 最終ミーティング
 19:00 夕食、隊員Nさんも合流
 21:30 今井さん宅に戻る
 22:00 空港へ 隊員Nさんと高田はお見送り

活動報告

目が覚めたらハノイに着いていた。見慣れた風景。スタツア中はハノイの今井さん宅を拠点として行動していたため、ハノイを出てどこか別の場所に行ってはハノイに戻ってくる、という繰り返し。数えてみると、ハノイINは4回目だ。空は相変わらずどんよりと曇っている。アンニユイの街、ハノイ。

安藤さんはプノンペンに行くため駅で解散してしまった。始めは10人でスタツアが始まり、途中で3人帰ったり、隊員の方や今井さん、ツアガイドさんと一緒に行動したりしてメンバーの数は常に変動していた。そして、今は6人。明日にはそのうちの4人が日本へ帰ってしまう。少しさみしくなる。

今井さんの家に着きほっと一息。朝ごはんがまだなので外へ出てフォーガーを食べに行く。ベトナム料理、満喫したなあ。いろいろなおいしい料理を食べられたのは、それを教えてくれた隊員の方と今井さんのおかげ。私たちだけで活動していたら食事のレパートリーは非常に狭かっただろう。

朝食のあとは全体ミーティングの17時まで各自自由行動。私は体調がすぐれなかったので大人しくベッドで寝て過ごした。せっかくの自由時間、外に遊びに行けないのは悔しい。でも、私はこの後も日本には帰らずラオスに行く予定なのでここで無理は出来ない。寝転がって今までの出来事を思い返しているうちに寝てしまった。

みんなの声で目を覚ましたら17時近かった。思い思いに最終日を過ごしたらしい。ハノイ市街で観光したり、スタツア中に知り合った人と会に行ったり、日本へのお土産を買ったり。

最後のミーティングが始まった。一人ずつ全体を通しての感想を話す。「もっと言葉がしゃべれれば良かった」、「様々な出来事が直接心に飛び込んでくるような感覚だった」、「カッコイイ大人にたくさん出会えた」、「楽しかったというより幸せ」、「いろんな世代いろんな身分の人といろんな方法でコミュニケーションを取るのが新鮮だった」、「忘れていた大事なものを思い出した気がする」など。

同じ日程で同じプログラムをこなしてきたけれど、抱く思いは皆違う。自分と同じものを見ても感じ方捉え方は決して同じじゃない。それを共有できる場が、バスの中だったり食事の時間だったりスタツア日誌だったり、ミーティングだった。こうやって人の感じ方を知り、自分の感覚を相手に伝え会話するのはとても面白い。

最後の晩餐ということで、キノコ鍋を食べに行く。何種類ものキノコにイモや鶏肉、ウサギ肉を煮て食べる。二村さんもやってきた。小学生が私たちにお礼のカードを作ってくれ、それを渡してくれた。ベトナム語で書かれた言葉はわからないけど、色鉛筆で描かれた絵を見ながら小学校で授業をしたあの時間を鮮やかに思い出す。

今井さんの家に戻り皆は荷造りを始める。メンバーと二村さんが買ってきてくれたケーキとチューを食べ、出発。私も桐生さんと一緒に空港まで見送りに行きたかったけど、体調のことがあったので玄関でさようなら。

あとで聞いたら、空港では問題なく手続きが済み全員無事に日本に帰ることができたそう。ただ、ベトナムはまあまあ暖かい気候だったのに日本は冬。帰国した日は雪が降るほど寒かったらしい。

スタディツアーは今日で終わり。列挙はしないがたくさんお礼を言いい人がいる。本当にありがとうございました。

(文責:高田綾子)



(3R イニシアティブにおける堆肥化工場見学)



(お世話になった青年海外協力隊の方々と)



(ダナン市、10-20 幼稚園)



(日本での事前ミーティング)



(バクザン省、タンミー小学校)



(Handicapped children village)



(バクザン省、ドインゴー小学校)



(バクザン省、ニンソン小学校)

参加者の感想

雨宮 新 *Arata Amemiya*

スタディーツアーを、ずっとやってみたかった。

大学に入ったら、何かしら社会や世界に目を向けた活動をしてみたいと思って、環境三四郎に入った。色々な活動に手を出してみたが、しばらくするとどうしようもない違和感と、物足りなさを感じるようになってきた。世界の問題について分かったかのように語り、議論している自分たちだが、本当に心から問題を解決しなければという使命感に燃えているといえるわけではない。なんだか自分のものじゃない借り物の言葉ばかりしゃべっているような気がして、後ろめたい気持ちばかり抱えていた。

本物が見たかった。貧困や環境問題が世界のどこかで本当に起きているリアルな問題なのだとしたら、それを目の当たりにしてみたい。ああこうしたことが問題なんだ、と心から感じて、その切実な感情を原動力にして本物の活動をしたい。そう思えばかりいた。

だから、今まで長い間、探し回った。住み込みで農業のバイトに行ったり、日払い派遣のバイトをしてみたり、国際ワークキャンプに行ってみたり。心から自分が取り組むべき問題が何なのか、それがこの胸に解るまで、色々なところをさまよい続けていた。

でも、いつまでもこんなことばかり続けているわけにはいかない、ということも分かってはいた。世界はこうなっている、その中で人々はこんな風に生きている、そんなことばかり語ろうとしていたが、ではその世界の中で自分自身は何を信じて、何をして生きているのか、という問いにいつまでも答えられずにいることが後ろめたくて仕方なかった。

つまり、僕はひとつの大きな問題の答えを捜し求めていたのだ。

道を究めたいと思うこと。

人と繋がりたいと思うこと。

その二つの志向は、矛盾してしまうことしかできないのだろうか？

何かに夢中になりたいと思う。でも自分の見たい世界だけ見て、自分の信じた道に夢中になって、そうやって行ったことが、結果として周りが見えていないことによって、他のものや人を知らないうちに傷つけてしまう結果になってしまうとしたら？

それこそが、たとえば開発と環境破壊の問題や、貧困の問題の根源にあるような気がしていた。



人間は豊かさを求めてきた。

豊かになりたいと願い続けて、努力を重ねて、科学技術を作り、文明を作った。

そして今度は世界のどこかでいま豊かでない人たちにも豊かになってほしいと願って、途上国に対して先進国が開発を進めるようになった。

でもそうして行った開発が、必ずしも途上国の人を幸せにしてきたとはいえない。

科学技術と経済原理のみに頼り現地の人々の伝統や価値観に目を向けることがない偏った視点で行われた開発が、時には現地の社会システムと生態系を破壊するような結果を招いてしまうこともある。緑の革命なんかはそんな失敗例だという。

だとしたら、目指すべきものは何だったのか？大事にすべきものは何なのか？そう考えると、何も解らなくなってしまった。

何がしかの答えを見つけたかった。現実には国際協力に携わる人がどんな風に、どんなことを思って日々働いているのかを知りたい。

ベトナムに行くにあたって、そんなことを自分の中での課題として持っていた。

ベトナムで見てきたもの、心動かされたものはあまりにも多くて書ききれない。

サパでの少数民族との出会いも、市場の風景も、フエで出会った尼さんたちとの交流も、食べ物も、メンバーとの会話のひとつひとつも、それぞれ強烈に印象に残っているけれど、何より決定的だったのはやはり青年海外協力隊の人たちの姿だった。

ベトナムに来て、たくさんの青年海外協力隊の人と会った。海外で働くということはどういうことなのか。何が彼らを動かしているのか、知りたいと思っていた。

どうして彼らは、わざわざ手間もかかり、危険もあり、日々の生活で当たり前で得られる物や人とのつながりからあえて離れてしまう覚悟をしてまで、海外に来て国際協力という形で働くことを選ぶのか。

それは強い思いに動かされてのこと。でもその思いは、世界を変えたいなんていう、肩に力が入った高尚なものばかりなわけではない。

とにかく自分が、自分の人生に対して妥協せずに一番納得できる道を探し続けたいという強い思いに、動かされ続けているのだ。

特に、ダナンで会った青年海外協力隊の人の話がとても印象に残っている。その人は幼稚園の先生をしている。社会主義国であるベトナムでは、教育のカリキュラムや指導要領なども日本とは違って、画一的に教えることをよしとするそうだ。そこで日本からの協力隊の人が日本式の教育の仕方を取り入れようと努力しても、認められなかったり、ときには逆効果だったりする場合もあるという。

本当に正しいことは何なのか。信じるべきことは何なのか。やりがいのある仕事は何なのか。きっとそれは考えれば考えるほどわからなくなる問題で、それでも考え続けなきゃならない問題だ。

協力隊の一人で何が変わえられるのか、とたまに無力感を感じたり、辛くなるときもあると

いう。そういうときでも毎日の仕事と向き合っていけるのは、今ここに、目の前に子供たちが居るから。世界の中でそれがどんな役割となるのかはわからなくても、とにかくこれが自分の仕事であり、自分はこの仕事を通して必要とされているから。

そんな想いが、彼らを動かしている。

青年海外協力隊の人たちはみな、自分の道を持っていて、その上で世界と向かい合っている人だった。

いつでも世界を背負ったつもりになっていなくたっていい。ただ一人分の人生を精一杯に、懸命に生き抜こうとすることからはじめればいい。

世界では確かに色々な問題が起きている。でも、そうした矛盾も不条理も抱えながら、世界は在って、僕らを生かしてくれている。問題ばかりに目を向けるんじゃなくて、そうした部分も含めて、まず世界をまるごと認めればいい。そしてその中で思い切り楽しめばいい。そういうことだったのだろう。

今久しぶりにベトナムで撮ったたくさんの写真を眺めてみたりして、ほんとにいい表情で笑えているなあと、自分でも驚く。心から楽しんでた時間だったんだなあと思う。事前の勉強会からスタツア中までずっと、夢中になって過ごしてきた。そんな時間を、このメンバーと一緒に過ごせてよかった。

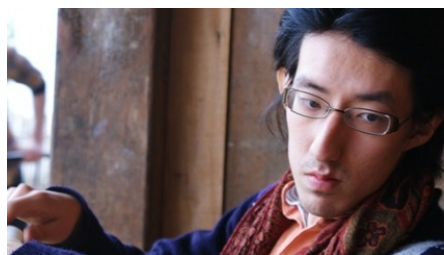
スタツアを通して、世界のこと、人間の暮らしのことについて以前よりずっと目を向けられるようになった。自分のものの見方や考え方も日々成長していった、柔軟になっていくのが分かった。何より、一緒に旅したメンバーの一人一人に対して、「この人はどんな風に考えているだろう」「この人はいま何を思っているのだろう」と考えたり、時に語り合ったりして、たくさんの部分で影響を受けた。自分は昔よりもずっと、人のことを知りたい、解りたいという志向を強く持った人間になってきたように思う。

今は日本で過ごす時間を大事にしなきゃいけない。留年までして理学部を目指すのは、日本に生まれて東大なんかに通っているという恵まれた境遇に対して忠実でありたいから。ここにいるからこそ手にすることができるものを、素直に受け止めてみたいから。その上で、そうして学んだことが何かしら誰かの役に立つような道を探してみたい。

でも、いつかは、またあの世界に戻ってみたいとも思う。今度は、自分も何かしら一人称で語れるものを持って。与えられるだけじゃなくて、与えることができる人として。その時には、世界はどんな風に見えるようになっているだろうか。とても楽しみだ。

今回のスタディツアーを企画して、長い時間をかけて準備してくださった桐生さん。協力してくださったたくさんの人。一緒に過ごしたメンバーの皆さん。全ての人に心から感謝します。ありがとうございました。

安藤 達也 *Tatsuya Ando*



どこを向いても子供たちの顔、顔、顔。こんなにたくさんの子供たちに出会ったのは生まれて初めてかもしれない。

子供たちというのはとても楽しい。大好きだ。彼らのストレートな感情表現は僕らが昔持っていて、今は遠い彼方にしまい込まれている子供心を思い出させてくれる。

それとむしろ、旅に出ているときに僕らは子供のときのように無邪気な感性を持てるような気がする。知らない国の知らない町で、知らない文化の中に暮らす知らない人たちと接し、好奇心を見開かせ、無邪気に物事を知りたいと思うから。

ベトナムの子供たちと、そんな旅に出た大きな子供たちが、一緒にいて遊んで、もうどっちが大人と言うこともないのかもしれない。

ここまで歓迎されるとは思っていなかった。初めての小学校訪問でどうなることやらとちょっと不安に思っていた Tan My 小学校。そんな僕らの不安はすぐに吹き飛ばされた。教室にいた子供たちはとにかくみんな元気いっぱいだった。無邪気に笑い、駆けまわり、跳びはね、時には少し照れ、そんな姿に僕らもつい顔がほころび、子供たちの環に加わる。子供たちを追いかける。言葉は通じなくても、彼らの意図は、その表情から手に取るように分かるし、僕らもまた笑顔で返す。

障害児村にいた子供たち。はじめはちょっと元気がない子が多いかな、って思った。照れてなかなか顔を出してこなかったり、おもちゃに熱中して他者に興味を示さない子がいたり。または元気がありすぎて、他の子たちとけんかばかりしてしまっている子もいた。でもちょっと時間がたって慣れてくれば、他の子たちと変わらない。折り紙を折って、鶴ができていくのを興味深く眺めていたり、追いかけたらきやつきやと逃げ回るし、「高い高い」をして持ち上げると満面の笑みを浮かべる。

幼稚園の子供たちも元気だったなあ。歓迎の手紙までいただいて。ホールでのイベントは、子供も大人も会場全体が一体となって大いに盛り上がっていた。はしゃがせすぎて食べたものを戻してしまっている子もいた。ごめんなさい。

一方で、学校の外で出会った子供たちも、同じくらい印象に残っている。サパからのトレッキングで出会った少数民族の子供たち。学校に行かずに観光客にものを売って暮らしている。ガイドのナムさんは、物売りとして生活することを覚えてしまうから、お金は渡さないで欲しいという。杖はいらないかとしきりに話し掛けてくる子供たちに、余っていたトウモロコシを差し出すと、彼らは夢中で食べはじめた。

フエの海辺であつた子供たちもそう。籠いっぱいポテトチップスなどのお菓子を持って、

海辺の海水客に売って歩いている。この子たちはお客からずっと拒まれ続けているのだろうか。僕らがそのお菓子を買うことでそれが商売になると思われてしまうから買わないというのもありなのだが、今井さんはお菓子を買う。子供の頃からずっと拒まれ続けることは子供たちにとってはいい教育にはならない、と。どちらが正しいのだろう。

「Just one dollar, one dollar, please.」

いまでも忘れない声が耳についている。子供たちのたどたどしい英語。カンボジアのシェムリアップ。オープンテラスのレストランで夕食を食べていると子供たちが、絵はがきや、リストバンドを片手に売り歩いている。ちょっと興味を示すと、ずっとテーブルから離れずに群がってきてしまった。食べ終わって、近くのブティックに入ると、ずっと入り口で僕が出てくるのを待っているようだ。困った。困った。

カンボジアはまだまだ物売りの子が多い。小学校で出会った子供たちと物売りの子たちは明らかに違う。外国人を見るたびに商品を宣伝し、お金を要求する。みんなに拒まれ続け悲しそうな目をするが、これも商売の演技なのかもしれない。たぶん本気で悲しんだり、笑ったりすることはしないのではないだろうか。

無邪気に笑う小学生の子たちと、そう年齢も変わらないのに、たぶん彼らは学校には行っていないし、行っていない（＝行けない）ことがお金をもらう口実になることも知っている。ある意味、達観したような、あきらめているような表情をしていることが、小学校で出会った子供たちとの一番の違いだと思う。

そんな子供たちを幾度となく無視してきたが、最後にと違う対応をしてみた。

5人の子が最後まで残っていた。リストバンドや絵はがきをしきりに見せてくる。親にそう教えられているのだろうが、そのあどけなさほもっと他の所に振り向けるべきなんだろうな。駆けまわったり、飛び跳ねたりして遊ぶことはないのだろうか。「just one dollar」なんてどこでそんな感覚を身につけたのだろうか？

1ドルで商品を買ってもらうか、とてもお腹がすいたから1ドルで屋台のご飯を食べたいという。もうすぐお腹がぺこぺこなんだと。こうすることは良かったのか分からないけど、一人から商品を買うのもためられるので、子供たちに屋台の店でチャーハンをおごってあげることにした。

13歳前後（にしては幼く見える）だという彼らはさして喜んだそぶりをするでもなく、またがつがつと飢えているように食べるでもなく、ただもくもくと食べていた。彼らにとって、こういうことはよくあることなのかもしれない。

帰りの飛行機の時間が迫っていたので、僕はそっと席を立つ。

いつまで彼らは物売りを続けるのだろうか、続けざるを得ないのだろうか？それが直接の解決にならないことは分かっているけど、僕らは物売りの子供たちを拒み続けていいのだろうか。格差とは言わないかもしれないけれど、学校に通っている子供たちは、10年もしたらそれなりの仕事を得て、立派な大人になっているのだろう。でも、物売りの子供たちはどのように育って

いくのだろうか。その子供たちにまた物売りをさせるのだろうか。その連鎖はいつたれるのだろう。

子供たちは生来無邪気なものであると、思っている。願っている。だけど——

無邪気な子供たちに、大人たちは昔の子供心を思い返す。逆に、無邪気を失った子供たちには、大人たちこそが無邪気に接するべきなのかもしれない。

そんなことを考えたスタディツアーでした。

最後になりますが、企画をしてくださった桐生さん、素敵な部屋を貸していただいた今井さん、一緒に旅行したみんな、暖かく僕らを迎えてくださった JICA、JOCV や関係者のみなさま本当にどうもありがとうございました☆



内島 健太 *Kenta Uchijima*

「ベトナムの生春巻きが食べたい！」という思いのみで飛び込んだ今回のツアーだが、実際、ベトナムの食べ物は概して素晴らしかった。生春巻きは入った店が良くなかったためか、あまりおいしいとは思えなかったことは残念であったが、サパの民家でいただいた揚げ春巻きは、自分達もその料理を少し手伝ったということもあったからか、極めて美味だった。アツアツの湯気が立ち込め、油でカリッと揚げられたライスペーパーと、それに包まれたジューシーな豚肉とが、僕の口の中で何ともいえないハーモニーを奏でた。舌にビリビリと伝わってくるその旋律は、まるでこの世のものとは思えないほど美しかった。



また、ベトナム風うどんともいえるフォーは、朝昼晩問わず何回も食べ、サークルのみんなへのおみやげに買うほどであったし、地元の隠れ家的なお店で食べたバインセオというお好み焼きもととてもおいしかった。バインセオのお店を紹介してくれたのは青年海外協力隊の方々であったが、彼女達には本当に感謝の気持ちでいっぱいである。こんなにも楽しいひと時をともに過ごせたことは一生の思い出といっても過言ではない。

異文化に接すると、ときたま強烈なショックを受けることがある、とはよく言ったものだが、今回の旅行で一番印象に残ったのは三つあり、それらは「ガチョウのゆでヒナ」と「ハトのから揚げ」、そして「ヤギのおっぱい肉」である。もちろん、これらはいずれも、その外見の気味悪さや作り方の残酷さを忘れさせるほどおいしかったが、例えばウシの睾丸をウマイウマイと言いながら食する、そんな日もひょっとしたら来てしまうのかもしれない、と思って、若干気持ち悪くなった。

デザートも充実していた。マンゴスチンと言う名のフルーツは、通称「果物の女王様」と言われるだけのことはあり、大変美味であった。スターフルーツはその名の通りの形でおもしろかった。シントーはいろんな味のあるシェイクみたいなものだが、マンゴー味がもっとも好きだった。また、暑い日ざしの降り注ぐ中、川辺の町ホイアンで汗をかきながら食べた、ケムと言う名のアイスクリームは、よく冷えていてとても甘かった。そして、旅先で偶然に出会った日本人バックパッカーと一緒に入ったお店で、ともに舌鼓をうったチェーの味は格段においしかった。タロイモとヨーグルトとタイ米とが絶妙に混ざり合い、舌にワンダホーな改革をもたらした。

他にもいろいろあった。寝台列車での移動は幻想的で、コンパートメントのベッドに横になって暗闇に飲まれると、まるでハリー・ポッターの世界に迷い込んだような錯覚に陥った。また、子供達とのドッジボールも楽しむことができた。彼らに元気をもらった、とでもいうのは、まだ早いのかな。

ご精読ありがとうございました。

河村 直哉 *Naoya Kawamura*

三四郎の活動から離れ、日々送られるメーリスを面倒に感じていた去年の秋、突然スタディーツアーのお誘いがあり、何を思ったのか参加してみることにした。久々の三四郎だ。

これは自身にとっては初めての海外旅行で、スタディーツアーどころというよりは、初めての海外ということに対する不安のほうが大きかった。さらに日程の都合上先にハノイに入って、途中で抜けてしまうという途中でずうずうしくも抜け、他の参加者に、こいつ初めての海外旅行で一人で行って大丈夫だろうか、と心配をかけてしまい、本当に申し訳ないと思っていた。

というわけで、これはスタディーツアーの感想というよりは、自身のベトナム旅行の感想といった意味合いが強くなると思う。

さて、本題に移ろう。ハノイの町の印象、それは初めて行った海外、そして日本と違い発展途上国であるということから、とても新鮮で活気に満ち溢れた町だということだ。道路という道路をバイクがひた走り、人々は店先でたむろし、彼らの生活をむき出しにしている。露店や物売りも多く、無機質な東京とは大違いである。自分たちとは違った文化や生活様式を持つ人々と触れ合うことは、とてもよい経験になった。みんなと合流するまで一人で町を散策していたのだが、ただ歩くだけでも面白く、自分で宿を探したり、英語で交渉したりと、刺激にあふれた毎日だった。

四日目、ホテルにてみんなと合流した。いよいよスタディーツアーの始まりだ。JICAのオフィスを訪れたり、サパヘトレッキングへ行ったりもした。しかし、それらの思い出よりも強く印象に残っているのはスタディーツアーの参加者や、旅先で会ったベトナムの学生やガイドさんの意識の高さであったり、しっかりとした考えであるような、普段よくも悪くもただぼんやりのんびりと日々をすごしている僕にとっては、自分自身への落胆さえ思えさせるようなものであった。

スタディーツアー以降、僕は自分の将来について真剣に考えようとしている。いまだにその将来の自分の姿というのがはっきりと見えてこないが、自信の興味の発展途上国の開発に関するセミナーなどには参加するようにしている。僕にとっては大きな進歩だ。自分に対して迷いや不安を感じているときは、思い切ってまったく違った環境に飛び込んでみるのもいいかもしれない。

最後に、桐生さんはじめスタディーツアーのメンバー、JICAのスタッフの方など、この旅でかかわったすべての人へ、本当にありがとうございました。



小松 才恵子 *Saeko Komatsu*

ベトナムの感想文を書こうとしているが、これがなかなか難儀である。放置しすぎてベトナムの鮮やかな記憶を失いつつあるというのが大きな理由だ。しかし私は、傍観者でいたつもりはない。曖昧ではあれ、私なりに何か求めるところがあって参加した旅だった。記憶をたどり、思い出しながら、書いてみる。



生きていくうえで「場所」の観念は思いのほか重要だ。もう少し若いころは、グローバル化とかボーダーレス化とかいう言葉に騙されて、自分はどこにでも行けるしどこでも生きていけると思っていた。大学1年の時に参加したタイのスタディツアーは、海外に行ったことがなかった私にとって、それを証明するための輝かしい第一歩のつもりだった。実際に行ってみてその考えが覆された、ということもなく、「私はどこででも生きていける」という手ごたえがあったと記憶している。生きていく上での選択肢の広さを確認した、そんな旅だった。

しかし大学というのは本来、社会へ出るというゴールに向け、生き方についての選択肢を少しずつ削っていく場である。2年生の進振りで、3年生の就活で、私も自分の世界を少しずつ収縮していった。自分が社会に何かしらの貢献をする方法を考え、人や世の中の流れを捉える仕事がしたいと思った。人や世の中の流れを捉える、なんてずいぶん大仰だが、何も地球規模で、世界全体の潮流を読んでやろうと息巻いているわけではない。というか、そんな能力はない。日本に絞ったらどうだろう。まだ大きい。限界集落に住む人がどんな生活をしているのか知らないし、沖縄の老人とは言葉も通じない。せいぜい自分が理解できる範囲というのは、今自分が生きている東京（とそれに順ずる都市部）くらいのものではないだろうか。東京にも意味不明な人はたくさんいるが、似たような場所で生きているという共通点があれば何とかなりそうに思える。

東京で生きている人がどういう生活をして何を考えて生きているのか、何が好きで何が嫌いなのか、それは今までとこれからで変わっていくのか。そんな問題に向き合う仕事として、私は広告業界を選んだ。「どこででも生きていける」と思っていた頃に比べて、私は自分の関心の範囲をずいぶん狭めてしまった。悪いこととは思っていない。むしろ東京と、そこで生きている人のことなら極めてやるぞという気概に燃えている。「一生懸命」と「一所懸命」、語呂としては「一生懸命」の方が好きだが、やはり正しいのは「一所懸命」なのだと思う。他の可能性を切り捨てて選んだものにしか、人は懸命になれないのだ。

選択肢を絞っていく中で、そんな決意を固めていった。可能性を切り捨てるのはそれほどつらいことではない。むしろ選択肢を減らすたびに、自分のかたちがはっきりしてくるようで心地よい。

しかし学生としての残り時間が少なくなってくるにつれ、いくつかの不安が心をよぎるようになる。ひとつは自分の選択が、本当に正しいだろうかということだ。昔はもっと開発とか貧困とかにも興味があつたはずなのに、あの時の気持ちはどこへ行ってしまったのだろう。「東京で生きる」ということにこだわりすぎていないか。

もうひとつは、私のまわりの人たちとの関係である。卒業を前にして、私は東京で働く自分のことを考え、地方や海外へと散っていく友人たちのことを考えた。高校を卒業したときも友人たちと離れ離れになったが、まあどこにいても同じように楽しく学生生活をやっているのだろうな、という共通のイメージがあつた。しかし今度は、それぞれ違う土地で、違うことをやりはじめるのだ。きっともう一生会わない人もいる。友人が他人になっていく。それを私はどう受け止めればいいのかよくわからなかった。

これが今回のスタディツアーに参加した動機だ。一度自分をちがう場所に置き、こだわりをなくして、ニュートラルな状態にして見つめてみたかった。

旅は悪無くすすんだ。3年前と比べて、日常の感覚で旅することができ、実に気楽にやらせてもらった。一緒に参加した後輩たちは、私とは違うもっと生き生きした期待を持ってベトナムに来ていた。彼らはタイでの私と同じく、世界がキュッと収縮する前の一番豊かな時期にいて、とても眩しく見えた。私も3年前を思い出し、今の自分と比べてみた。そしてひとつめの不安、自分の選択が本当に正しかったのかどうかについて、やはり正しかったと思った。開発や貧困といった問題に関心がなくなったわけではない。ただそれらの問題を考えるにしても、広告をレンズにしたアプローチしか私にはできないのだ。しかし東京という場所にこだわりすぎていたのは事実だったと思う。ホーチミンでもハノイでも面白い仕事ができそうだと思えたのは収穫だった。

青年海外協力隊の人達と出会った。みなそれぞれ思うところあって、ベトナムに来た人々だ。人生の小休止という感覚の人もいれば、ベトナムという土地にかなり入れ込んでいる人もいた。彼らを見ていて、遠くはなれたところ、自分の知らないところで、色んな人ががんばっているのだなと思った。あたりまえじゃないかと言われそうだが、「砂漠の真ん中の、誰の眼にも触れない美しい花は、存在しているといえるのか」という命題(?)を思い出していただきたい。私は22歳にしてようやく「存在している」と答えられるようになったのだと思う。大学時代の友人たちは、それぞれ全く別の道を歩み始める。いくらか親しくなった人との別れには、会えなくなることそのものへの寂しさとは別に、自分は必要ないのだということからくる寂しさ

がつきものだ。しかし、たとえ会えなくても、たとえお互いにとってお互いが不要でも、「きっと彼ら彼女らはがんばっているだろう、むこうもそう思っているだろうから、私もがんばらなくてはいけない」という気持ちになれば、けっこう救われるはずだ。

今回の旅に参加したメンバーだってそうだ。きっとすぐに、一緒に旅したことが信じられないくらいになる。旅先で真剣に考えた「自分の将来」と、全く異なる人生をおくる人もいるかもしれない。できるだけ会う機会はつくっていきたいが、次第にその回数も減り疎遠になるだろう。それでもいい。どこにいても、何をしていたても、どこにいて何をしているのか私は知らなくても、みんながんばって生きていると思うからだ。そんなどこにいても知れない未来の仲間たちに向け、最近読んだカート・ボネガット Jr の小説から素敵なメッセージを添えて、感想を終えようと思う。

“I'm Here. I'm Glad You' re There.”

私はここにあります。あなたがそこにいてよかった。



高田 綾子 *Ayako Takada*

真っ白な紙に、ベトナムでの出来事を思いつくままに書き連ねてみた。

生まれて初めての経験が山ほどあった。

こんなに印象深く、刺激的な日々は20年間のうちでも数えるほどしか思い出せない。



2週間足らずで、本当に多くの出会いがあった。JICA 職員・関係者の方々、協力隊員の方々、3R プロジェクトの青年たち、小学校や幼稚園の子供たち、マーケットの売り子、屋台のおばちゃん、タクシーの運転手、サパのツアーガイド、ダナンの橋で夜遊びする若者、レストランまで連れて行ってくれた子供たち、パゴダの女の子たち、そしてスタツアのメンバー。

短期間でこんなにたくさんの人間と接したのはおそらく初めてだ。ベトナム語がもっと話せれば、英語がもっと話せれば、と思うことは何度もあった。でも、言葉が通じないからこそ楽しかった。

言葉の前に気持ちありきの人間関係。とても心地よかった。仲良くなるのに言葉はいらない。仲を深めるための道具として、言葉は非常に優秀かもしれないけど、気持ちが通じれば言葉なんてなくていい。

自分の持つ、選択肢の多さに気づいた。

2年後、院に進むか就職するかを迷っている。そんなことを協力隊員の方に話したら、君は自分の進路を選べるんだね、というようなことを言われた。

日本に生まれ、こうやって海外に旅行するくらいの生活の余裕を持ち、考える時間を与えられている。ベトナムの小学生には農家に生まれ、農家を継ぐことしか選択肢のない子どももいる。好きなものを食べ、好きな物を買ひ、好きな所へ行くという贅沢。ああ、やはり自分は豊かなのだとしみじみ思う。ベトナムの子供が豊かでないというわけではないけれど。

以前は、そんな恵まれた環境で生きていることに後ろめたさを持っていた。後ろめたさよりも強い罪悪感を。でも、何がきっかけで変わったかはわからないが、自分は自分、他人は他人で割り切れる気持ちが出てきた。恵まれているという立場から、恵まれていないと思われるような生活の人々を憐れむような、そして申し訳なく思うような気持ちはもうない。かと言って無関心になったわけでもない。頭で理解しようとしていた偽善が、感覚的にわかったとでも言おうか。

自分が日本人であること。当り前のことを意識した。そうしたら、自分は自分であること。それも当り前。

日本で生活することの安心感は絶大。さみしくなって誰かと連絡を取ろうと思えばケータイ

を開けばいい、学校に行けばいい。病気になっても病院に行けば安心。薬を飲んで栄養のあるものを食べれば治るだろう。そんな風に、日常生活を送るのに不安を抱かなくて済むのも、豊かな証拠なんだろう。

小学生、幼稚園児と遊ぶのは久しぶりだった。高校2年の時に家庭科の実習で保育園に行った、それ以来。珍しいもの、新しいものには興味津々。遊び始めたらもう、楽しむ、ただそれだけ。ひたすらジャンケンを繰り返して飽きないのかと思うけど、飽きることがない。犬がいつまでも音の鳴るボールで遊ぶように、子どもも単純な遊びをいつまでも続ける。そんな彼らと自分を比べて、大人になったんだなあと切なくも嬉しくもなった。

胸を張って、「これを学んだ!」、「自分はこう成長した!」と言えるものは、正直ない。経験値は手に入れたが、レベルアップするほどの経験値ではないということか。しかし、レベルアップに近付いたことは確かだし、持ち物は増えたはず。そして、仲間も。ベトナムでの時間・思いを共有したスタツアメンバー、心が通じたと思えるベトナム人たち。二度と会うことのない仲間もいるだろうが、共通の思い出があればそれは仲間だ。

また、ベトナムに行きたい。

ベトナムで過ごした時間は、とても、とても満ち足りていた。

桐生さん、今井さん、隊員の方々、その他協力してくださった方、スタツアメンバーの皆さん、本当にありがとうございました。



丹羽 桃子 Momoko Niwa

ただベトナムに旅行に行こうって誘われただけのはずなのに、気が付いたらスタツアメンバーになっていた。今回の旅の素直な印象はそんなところですよ。

私のベトナム・スタツアは前半をちょっとつまみ食いさせてもらった感じでしたが、楽しませていただきました。旅の道中は1年生の時に行ったタイのスタツアのことをよく思い出しており、タイとの違い・変化みたいなものを感じるが多かったように思います。自分自身の変化を感じたのもそうですし（態度がでかくなった!）、リーダーである桐生さんの変化や、スタツアそのものの雰囲気がタイの時と大分違うなということも強く感じていました。ですので、駒場生のみんなとは少し違う視点で旅に参加していたかもしれません。

旅の途中その時々で感じたことなどは、それらを上手く表現する言葉が見つからないため、ひとまず心の中に留めておこうかと思います。ただ、今回一緒に旅ができたみんな、ベトナムでお世話になった方々、出会えた方々、すべての人に心からの感謝を。

今回は完璧に傍観者だった丹羽より。



三上 貴司 *Takashi Mikami*

選択肢は誰よりも多い東大生。高田さんは、東大生はそれなのに選択肢を失うことを恐れるのだな、とスタツア日記に書いた。ぼくは「学問」な道へ進むことへの不安を感じていた。社会貢献とか、そういうことから離れてしまうような気がした。高田さんは、好きなこと、それをまずは考えたいということを言っていた。義務感とか、そういうことでは、モチベーションが続かない。

ぼくは、これからどんな道を歩んでいくのだろうか。こうして、いろんな経験をして。見て。話して。聞いて。よくわからない。何を求めているのか。



幸せの原点。それは、誰かとともにいること。誰かと話し、笑い合うこと。何かをすることではなく、在ること。すごくそう思った。娯楽がないから、なのかもしれない。でも、大切な、日本に帰って、日常に帰っても、きっと忘れちゃいけない、大切な大切な感覚なんじゃないかな。

夜、橋の端ではしゃぐ若者たち。ビーチではしゃぐ人々。招いてくれた尼さん、昨日ビーチであっただけのぼくらに、あんなにもてなしてくれた。案内をして、肉を食べないことについて話していた時にふと自虐的な表情を見せた大学生のお姉さん。

言葉をぼくは大切にしたい。だけど、子供たちと遊んだり、言葉の通じない方々と話そうと一生懸命になっている自分は、たくさん表情をつくり、たくさん身振り手振りをし、必死になって伝えようとしていた。言葉は大切。それも同時に切に感じたし、ぼくは言葉を信じていきたい。それでも、忘れちゃいけないこと。届かせるのは言葉であると同時に、心であり、イメージ。

日本で遊ぼうと思ったら何かをするということに主眼がおかれる。でも、本当の遊びは、誰かといることということなんだなあ。

サパツアーガイドのナム、本当にすてきな人だった。面白いし、同時にしっかりとした考えを持っている人だった。教育、観光の問題、ベトナムの近未来。観光客の子を身ごもるクロモン族の娘。Buy for me?

江藤さんが、ベトナムはきっと、自分でやっていける。ただ、もし変わりたいと思うのなら、私たち外からの力も必要だと思う。ということを書いていたことがすごく印象に残っている。そして、教育分野は、JICAの中で縮小していくことになっている。教育は、国家の根本であり、そこに外から干渉されることはいや？自分が来た意味。日本的な教育を強いることが良いこととは限らない。だから、学び取りたいことがあったら、学び取ってね。冗談半分。がんばりすぎないこと。あさこさん、どんな気持ちで、その考えに至ったのですか？

ぶくぶくした都会の幼稚園児たち。細い軽いバクザンの子供たち。

あの招いてくれた尼の子、すっごくすてきな笑顔をしていた。彼らがどんな過程で尼となり、どんな思いでいるか、わからないけれど。どうしてそこまで、与えてくれるのですか？

ぼくは、「特殊」な生き方はできないのではないかなと思う。それでも、「二流の奇人」という言葉を今でもぼくは忘れずにいて、何か自分だけの道を造りだしていきたい。

ベトナムの小学校は、クラスがレベル別になっている。幼稚園ですら、そうらしい。幼稚園では追加でお金を払い登録した子たちだけでピアノ、踊りなどを習う。親たちも必死で。詰め込み教育を望み。ほんの一部の子が大学へと進む。校長先生が子ども達に言っていたのだという。「あなたたちもがんばれば日本へ行けるのよ」。

たぶん、3R プロジェクトの見学の時に出会った大学生たちは「勝ち組」なのだろう。富裕層なのだろう。

ぼくは？

もの売りの子等。もの乞いの子。ストリートベンダー。無視することは、正解、かな？
ナム、あなたの思う、あるべきベトナムの姿は、どんなものですか？

日本に帰ってきた。すべてが日本で。ここが、ぼくのいたい場所です。ここで、死にたい。また、クールな日々が始まるのだろうか。それは、結局、ぼく次第？ ある程度は、この社会の問題？

東大生的なあさこさん？ 特殊なめりさん？ うまくいつてきたぼく。幸せもののぼく。何かを見てないの？ よくわからない。でも、見たい。いろんな人々を。何を思い、どう生きているのかを。それは、行き過ぎた傲慢？

これからは、日常を少し違って感じられるかな？ うん。感じるんだよ。感じようとすれば、いろんなことが感じられるんだよ。こまさんも言っていたけど、日本にもたくさんすごいことをしている人はいるし、日々出会い別れている。違うのは、いろんなことだけど。でも、在る程度はやれるさ。

ぼくは、言葉にすることに時間がかかる。そして、言葉を飲み込みがち。みんなの行動、発言を見聞きしていると、本当に自分ってだめだなって思う点がたっくさんある。そのうち、どれほどが変わりうるのかなのはわからないけれど、素直にいいなと思う部分は思っ、自分を作っていけたらいいな。

時々、人付き合いに疲れてもういいやって思うこともあるけど、スタツア中もあつたけど、でも、よりいっそう、人とのつきあいを楽しんでいけないかな。うん。きっとできる。人付き合いは良いことばかりじゃないし、楽しいこと、気楽なことばかりではないだろう。けど。これからも、ぼくは「人とのつながり」を求め続けて行きたい。

教育。今のぼくにとって、すごく合っているのではないかと感じるようになった。そういう意味で、研究者を本気で目指し、大学で、「学問」とは別の部分で「教え教えられる」ことができないだろうか、と思ったりもする。

桐生さんが言っていた。何か自分の道を進んでいる人は、熱いものを持っているし、それこそが人を動かすんだと思う。どんな大きなことも、偉大なことも、始まりは一人の人間の熱い思いで、それが人を動かしていくんじゃないか。

ぼくらとは、まったくちがった生き方をしている人たちがいる。

最後の小学校で、はじめの風船の作りはじめは、一緒にやってくれるけど、おずおずとって感じで、だけど、やっていくうちに一つの空間がそこにできてきて、笑顔が見えて、兜を作るときには教えて教えて！という感じになって。ぼくも楽しくなって。きっといきなり踊ったら、幼稚園みたいで、ポカーンとなるのだと思う。だけど、一つの時間、空間を共有した後だから、ぼくらは他人ではなく、友達だから！、だから、拍手してくれるし、笑顔で見えてくれるのだと思う。

江藤さんの学校での話を聞いていて、いいなあと思ったのを覚えている。忘れ物の罰。告白しちゃったり！ 今の教育の流れ、それでいいの？ お母さんたち。そして、ベトナムはどうなのかな。今の国家体制を維持するためには、今の教育は役立っているのだろうと言っていた。だけど、すでに一部の富裕層、権力者たちは、その子をインターナショナルスクールといった、民主主義的な学校へ行かせ始めているという。情操教育。うさんくさいけれど、その発想があるのとないのとは、ぜんぜん違う、と言う。

二村さん、2年だからこそやっていけるというのはある。もし、無期限、ずっとここでやっていけるかという、それはできないかなあ。ほんとに些細なことなんだけど、本屋に行って立ち読みしたいなあとか、そういう時、日本に帰りたくなって思う。そんなことを言っていた。

大学出てボランティアをしてみるとかは、逃げだと思うから。自分で生きていけない奴の逃げだと思うから。偽善。まともに卒業して、まともに就職して云々。そんな話を聞いたことがあった。

言いたいことはわかる。自分はボランティアとかで生きていこうなんて思ってはまったくくない。それでも反発を心の中で感じているのは、きっと、ぼくはボランティアとか、そういう生き方を認めているから。あるいは、どっかで憧れているから。偽善。そんなのは分かっている。偽善でないボランティア、あるとすれば、それは怖いとすら感じる。

二流の奇人。言葉が浮かんた。

ベトナムへ行ってきた。ぼくは、これから、どうなっていくのだろう。

ベトナムについて、もう（たった？）日本に来て数日で、気持ちも薄れていく。明日から、普通の日記に戻ろうかと思う。日本にて、日常に、意識的に入っていこうかと思う。そうすることで、日常は、日常を越えた意味を、価値をも帯びるのではないか。この線路を降りずとも、すべての時間を魔法みたいに見、この線路を降りずとも、虹を架けるような誰かに会うこと

はできると、そう信じ。煩雑な日々、「要領よく」かつ「愚直に」生きていこうじゃないか。いろんなやるべきこととやりたいことがあって。なお時には静かな時も過ごす時、きっといろんなことが輝いて見えるさ。

幸せなら態度で示そうよ！

////////

日記からの抜粋。読み返してみると、いささか乱文で、載せることに躊躇もした。でも、帰りの飛行機、電車、そして戻りゆく日常との狭間に書いた文章達は、きっとぼくにとってのベトナムスタツアと受け取ったものを一番映し出していると思うから、色々と削除したり少し表現を変えたりもしたけど、基本的にはそのまま転載した。

今日、2009年4月14日(火)、ぼくはこの文章を量子力学Ⅱの講義中に書き始めた。当たり前の、退屈にも思える日常が、ぼくを包んでいる。

大勢の生徒が、黒板の数式を見つめている。ある者は眠り、ある者はノートに向かい、ある者は内職をし、ぼくは、3限で提出するレポートを書いた後、この感想文を書いている。

新学期だし、新しい出会いもあった。いろんな自分の変化、周りの人たちの変化を思い、ふと感傷的になったりしている。満員電車で一時間強揺られ、イライラと空しくなったりしている。

ベトナムでの日々が、わからなくなる。

何がわからないのかは、よくわからないくせに。

そして、思い出すことも、忘れていくの？

ふん、そうはさせないさ。

たくさんの言葉たちが、写真たちがいるから。

そして、忘れたくないというこの気持ちが、あるのだから。

このツアーの意味も、きっと変わり続けていく。ぼくとともに。

それでいい。

それがいい。

心より、ありがとう。

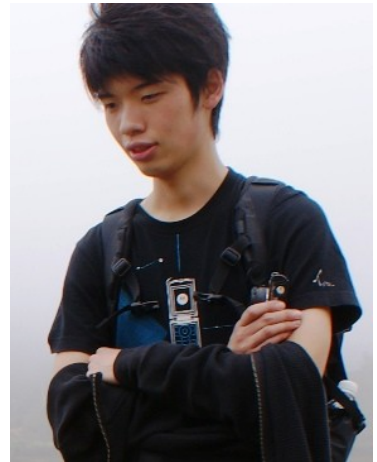
山崎 潤一 *Junichi Yamasaki*

僕は元来旅好きで、旅行をすることは多いのだが、今回の旅は後輩らと一緒に行くという事で、その一点が今までの旅とは違ったのだと思う。途上国や海外に行くのが初めてだという皆の、その日ごとの鮮烈な感想を聞かせてもらうのが非常に興味深かったと覚えているのは自然なことだろう。

僕はと言うと、後輩らと旅をする中で彼ら彼女らの反応を見て、少しばかり昔の自分とそれから辿ってきた道を思い出すこととなった。二年前、後輩らと同じ年の時、開発の世界に飛び込もうと思いインドに研修に行ったことがあった。あれからというもの、開発経済を専門にして色々と勉学なり研究なりをしてきた。そういうことなので、当然開発に興味を持っている人が周りに多い中、あたかもこの道を進むのが当然のように進んできたが、気がつくやうに道をかなり進んできたようだ。後輩らが僕の事を「開発の専門家のたまご」という風に見ていると知った時、その事に気がついた。そして僕が進んできたやうに後輩らもこれからどこかへ向かっていくのだと思うと、どういふ道を選び、辿っていくのか楽しみに思えたのだった。

途上国の農村に行くのはこれが4回目になることもあり、新鮮な驚きといった物は段々と自分の中から失われる一方、「ここで仕事がしたい」と思うようになってきた、そんなことを認識した旅だったとも思う。もう旅人として行くよりも、研究をするなり仕事をするなり、関わり方は今の段階では分からないが、もっと深く知り現実を変えていきたい。

ベトナムから帰って来て早一か月以上経ち、身分も大学院生となった今だが、常にあの風景を本棚の向こうに浮かべて、日々研究室の机に向かう生活を僕は送っている。



結びに

私は、学生時代から様々な団体の主催する海外スタディツアーに参加してきました。社会人になった今もこうして、今度は企画者として学生とともに途上国を訪れ、その国の現状や、そこで働く人々の姿を伝える活動を行っています。

私は、NGO 職員や青年海外協力隊経験者でもなければ、どこか特定の国を専門に研究している訳でもありません。そんな私が、一体なぜ海外スタディツアーという名の「非日常空間を共有する旅」にこんなにも魅力を感じているのか。その理由を、本報告書の最後にお話させて頂きたいと思います。

世界の現状をこの目で見たい。自分が成すべきことを探したい。そうした情動に突き動かされて、私は大学入学当初より、お金は無くとも暇さえあればアジア十数カ国を訪れてきました。

しかしながら、訪れた国々のほんの一部の景色でさえ、浅識な私にとってはあまりに広大でした。ましてその中から自分が献身すべき事象を選び取るなど、到底不可能なことに思われました。その一方で、それまで自分が抱いていた常識では捉えきれないほどの世界の多様性を垣間見た事で、眼前に広がる膨大な数の選択肢に気付き、そうでは無い圧倒的多数の世界の人々と比較した自分の立ち位置を自覚した日々でもありました。自分の進むべき道を自分で選べること。その幸福感と責任の重さを初めて教えてくれたのが、学生時代の私にとっては「旅」だったのです。

しかしながら、相対的に多くの選択肢を持っているという事は、逆の言い方をすれば、それは多くの選択肢から何か一つを選び取る必要に迫ら

れた時、それだけ多くの選択肢を捨てることを意味することにも気が付きました。捨てない事は簡単です。ですが、一人の人間が出来ることには限界があるものの、社会に貢献する方法を考えると、やはり他の選択肢を捨てること無しに前進する事は出来ません。

自分が本当に何かをやりたいと考えたとき、より多くの選択肢を捨てるためのエネルギーは、一体どこから湧いてくるのだろうか。そんなことを、今回の旅で考えていました。

私は、人が何かを捨てる時に必要なのは、勇気ではなく覚悟だと考えています。進学、就職等を通じて取捨選択した道は、やがてその人の価値観の根底となり、目指すべき夢へとつながっていくものです。その選択に後悔しないという覚悟。自分の夢に絶対に妥協しないという覚悟。自分が一番面白いと思うことに妥協しない覚悟。その信念を貫き通すことに物怖じしない覚悟。そうした覚悟が、新しい一歩を踏み出す原動力になると、私は考えています。

それを教えてくれたのが、青年海外協力隊の方々はじめ、これまで私が「旅」で出会ってきた多くの人々でした。各地で働く「カッコいい」人々の姿を



通じて、どれだけの知識と経験を積んでも、他者の覚悟を結実させることが出来るのは、他の誰かの本気の熱意だけだと、私は考えるようになりました。近頃の誰かを変えることが、組織を変え、地域を変え、国を変えていくことにつながる。そんな信念を抱いて自分の道を歩いている方々が、世界中にはたくさんいました。どんなに大きな歴史の動きも、その最初の渦を巻き起こした人間が確実に存在していたことに、先ずは自覚的でありたいと自分に言い聞かせるようになりました。

その連環は、何も時代の潮流などと言う大それたものではなく、私たち自身にも当てはまるものでしょう。私たちがこうして学習し、ベトナムを訪れて活動を行おうと動機づけられた背景には、過去に出会ってきた多くの先輩や友人、教師や家族の熱意があったはずなのです。その事実を心に留めて、彼・彼女らに対する感謝の気持ちを忘れずに生きていきたいと思っています。

自分が当たり前と感じている日常から少し離れて、非日常空間を他者と共有することで、こうした感謝の気持ちに対する強い実感が得られるところに、その原体験を共有できるところに、私は海外スタディツアーの魅力を感じているのです。

本ツアーへの参加者に一様に同様の感想を求める訳ではありません。ただ、今回僕らがベトナムで出会った方々は、そうして大きな一歩を踏み出し、社会を変えようと奮闘している方々です。こんな生き方をしている日本人が、日本のみならず、今も世界中に沢山いるのだという事実を、彼・彼女らに対する敬意と感謝の気持ちを、どうか忘れずに自分の進む道を選びとって欲しいと思っています。

欲を言えば「今度は自分が」と、何かを変える事に本気になってみてくれたのなら、今回のスタディツアーがそのきっかけになったのなら、主催者としてこれに勝る幸せはありません。その覚悟こそが、これから私たちが会おう人々を動かす力になると思うからです。

最後に、プログラム全体を通してお世話になった全ての方々、特に JICA 関係者の皆様、青年海外協力隊員の皆様をはじめ、環境三四郎の皆様、(社)青年海外協力協会の皆様、そして参加してくれたメンバー全員へ心から感謝申し上げます。

2009 年 5 月
企画代表 桐生朋文

